

紀要

39

- 高島市仏性寺遺跡出土縄文土器の再検討(1)…………… 小島 孝修 (1)
- 布留式併行期の受口状口縁甕について…………… 伊庭 功 (15)
- 市三宅東遺跡の鏃形石製品とその意義…………… 宮村 誠二 (25)
- 滋賀県内の出土事例からみた斎串の一例について
—上御殿遺跡の調査成果から—…………… 中村 智孝 (35)
- 滋賀県内における猿投窯産須恵器の流入
—貯蔵器種を中心に—…………… 高島 悠希 (41)
- 条里地割からみる佐和山城下町の形成過程…………… 山口 誠司 (53)
- 三次元計測の実験的試行
—等高線図の作成とオルソ画像の作成—…………… 福井 知樹・三好 佑佳 (62)

滋賀県内の出土事例からみた齋串の一例について

—上御殿遺跡の調査成果から—

中村智孝

目次

1. はじめに
2. 上御殿遺跡の調査成果について
3. 河道(16区S1-1)から出土した齋串について
4. 県内における齋串Cの事例
5. 齋串Cについて
6. おわりに

— 論文要旨 —

「齋串」は刀形などの形代とともに使用された木製祭祀具のひとつで、古墳時代後期以降にみられるものである。出土例が増加する奈良時代や平安時代に比べ、6世紀から7世紀にかけての古墳時代については、その様相は明らかではない。

高島市に所在する上御殿遺跡では、古墳時代から平安時代にかけての河道から多くの祭祀具が出土し、各時代で使用された祭祀具の様相や変化などを示す調査成果が得られている。このうち、調査成果によって確認できた古墳時代の齋串Cについて、県内の出土事例をふまえてその特徴を示した。

——— キーワード

古墳時代 木製祭祀具 齋串

1.はじめに

古代において使用された木製祭祀具は、刀形・舟形・人形・馬形などの様々な形代が主に知られている。これらとともに出土する木製品に、「齋串」と呼ばれるものがある。「削りかけ」や「挿幣帛木」などとも呼ばれ、薄板状や棒状の素材を加工して串状に作りだしたもので、多様な形状のものが存在する。

人形などに比べて単純な形状であることなどから、認識され始めた当初は研究の対象として注目度が低いものであった。そのような中で、分類や変遷を中心とする検討が黒崎氏によって行われた(黒崎1977)。分類については、この遺物の特徴である切り掛け(切り込み)に注目し、有無や場所・回数・形状などの基準をもとに6種類が提示された。変遷については、6世紀に薄板状の形状をした2種類が出現し、7世紀末になって出土例が増加していく中で8世紀には新たな形状のものや立体的な形状をしたものが加わり、多種類が同時に使用されていることが示された。切り掛け(切り込み)については、一か所での回数や場所が徐々に増えていくことが明らかにされている。性格については、万葉集の短歌を手掛かりに、地面に刺して聖域を画することや供物を標示することなど多様な役割を担っていたことが想定され、神の依る「神聖な木」としての役割が本来的な性格とされている。

県内の遺跡においても多数の出土事例が存在する。その中でも高島市に所在する上御殿遺跡は、一遺跡としては極めて多い556点が出土している。この遺跡では、古墳時代後期から平安時代前期にかけての河道から、齋串のほか刀形38点、人形127点、馬形60点が出土し、これらとともに祭祀に使用されたとみられる土師器甕や土師器皿、刀子などがみつまっている。これらによって、各時代で使用された祭祀具の様相や変化などを示す成果が得られている(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2019)。

齋串は古墳時代の出土事例は多くはなく、奈良時代や平安時代に比べてその様相は明らかではない。上御殿遺跡の調査成果から、古墳時代に限って使用されたとみられる齋串の一例を取り上げて、県内の出土事例とともにその特徴について示していきたい。

2.上御殿遺跡の調査成果について

上御殿遺跡は、高島平野の南側を流れる鴨川の左岸に位置する。対岸には、近江の六世紀を代表する古墳である鴨稻荷山古墳が所在している。この遺跡で検出した河道(16区S1-1)は古墳時代から平安時代にかけて流れていたもので、河道幅や流れる位置が時代によって変化していたことが確認できた。そのなかで、古墳時代後期(6世紀中頃から7世紀初頭)の河道は東西方向に延びる箇所南岸を流れ、遺物群2とした多くの遺物を含む堆積が東西約34m

にわたって認められた。出土した遺物には祭祀具や工具・農具・容器など様々な木製品があり、中には琴・団扇形木製品・唐臼の杵・壺釜などもみられる。木製品以外では、製塩土器やフイゴ羽口、鍛冶滓も出土している。

この堆積に覆われた河床では、河川幅に合わせて作られた幅約3.2mの堰を検出した。堰は上流に分水する溝がないことや周辺の地表面との高低差などから、水を一定程度まで溜るためのものであったと判断している。木製祭祀具については、齋串115点・刀形34点・舟形1点が出土している。堰の上流側では齋串5点、刀形11点がまとまって分布しており、堰の周辺から出土した齋串の点数は、その他の場所に比べわずかに多い傾向が認められている。ここからは舟形や琴も出土しており、堰によって作られた水場の周辺において木製祭祀具などを使用した祭祀が執り行われていたと想定される。

この河道に面して、南北45m以上、東西65m以上の範囲を溝で囲った場所がみつまっている。溝から出土した土器には、点数は少ないものの焼け歪んだりした不良品の須恵器がみられる。窯から運び出された須恵器を選別していたとみられ、須恵器生産や流通に関わる場所であった可能性が考えられる。

木製品などの多様な遺物を所有し、地域の生産や流通にも関与していたとみられることから、地域の拠点となる集落であったと考えられる。刀形や齋串などの祭祀具を使用した祭祀については、この集落を治めた有力者によって行われたものと想定される。

3.河道(16区S1-1)から出土した齋串について

河道(16区S1-1)から出土した齋串は、4種類の形状が確認されている。齋串として特定することが困難な棒状のものを除くと、薄板状のものは3つの形状(A・B・C)がある(図1・3)。齋串Aは両端を斜めに切り落としたもので、平面形が台形のもので平行四辺形のものがある。齋串Bは上端が圭頭状のもので、下端は同様かやや尖った形状をする。齋串Cは齋串Bと同様の両端を持ち、側面にケズリを施して幅の広い上部と幅の狭い下部からなる形状をしている。

切り込みや切り欠きは、切り込みのないもの(0)、切り込みを両側もしくは片側に1回切り込むもの(1)、切り欠きを両側に施すもの(2)が見られる。形状と切り込みの関係については、齋串Aは(0)のみ、齋串Bは(0)と(1)、齋串Cは(1)のみが確認されており、両端がなく形状が不明な(2)の破片が1点のみ出土している。

全長がわかるものについては、齋串Aは9.0~20.7cm、齋串Bは25.2cmと41.2cmを測る。齋串Cは全長がわかるものがなく、40cm以上や60cm以上になるものがある。齋串Aは小型、齋串Cは大型が主体であるといえる。出土点数については、齋串Aは40点以上あるのに対して齋串Bや齋串Cは10点程度とみられ、点数に差が認められる。

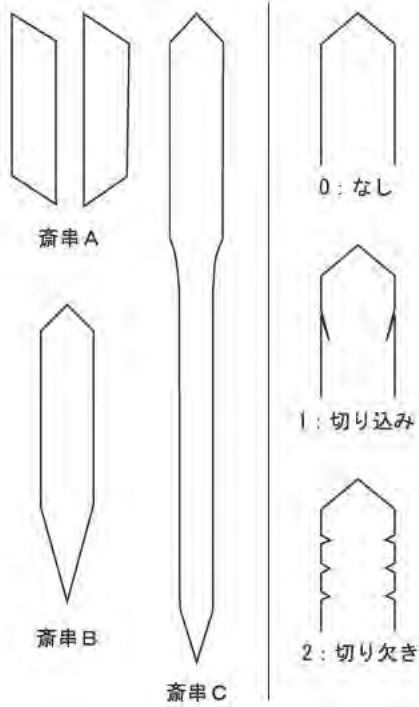


図1 齋串の分類例



図2 遺跡分布図

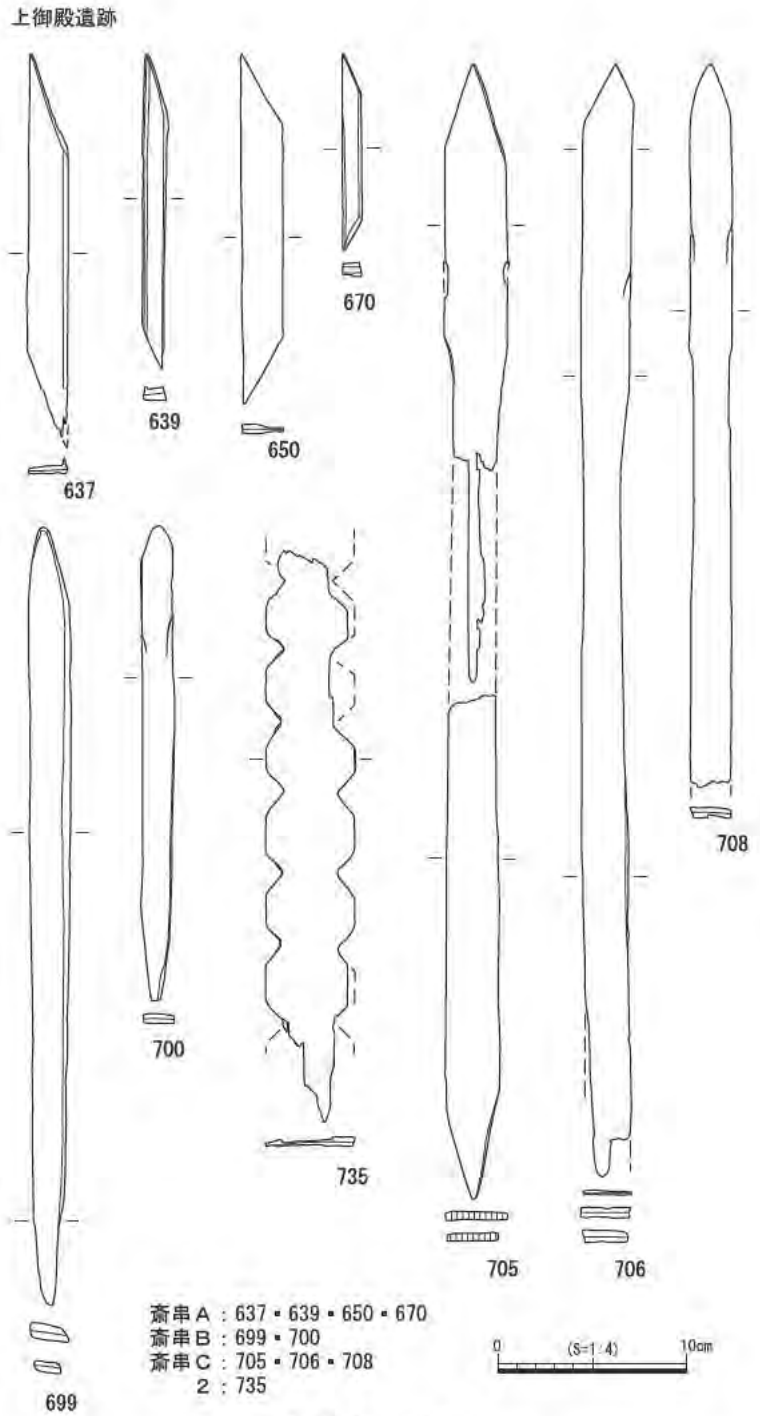


図3 齋串 実測図1

表1 齋串C 一覧

NO	報告NO	遺跡名	長さ(cm)	上部幅(cm)	切り込み
1	705	上御殿遺跡	(59.3)	3.3	両側1回
2	706	上御殿遺跡	(58.8)	2.7	片側1回
3	708	上御殿遺跡	(38.3)	2.3	両側1回
4	1	穴太遺跡	63.5	2.4	両側1回
5	2	穴太遺跡	(64.2)	2.4	両側1回
6	3	穴太遺跡	(37.0)	2.8	両側1回
7	4	穴太遺跡	(43.8)	2.9	両側1回
8	5	穴太遺跡	(39.2)	2.9	両側1回
9	45	穴太遺跡	(53.8)	3.2	両側1回

NO	報告NO	遺跡名	長さ(cm)	上部幅(cm)	切り込み
10	327	神宮寺遺跡	(15.6)	2.2	両側1回
11	B1	大戊亥遺跡	(51.6)	2.8	両側1回
12	B2	大戊亥遺跡	(15.4)	2.7	片側1回
13	B3	大戊亥遺跡	(33.4)	1.7	両側1回
14	W268	相模湖底遺跡	(31.5)	2.5	両側1回
15	394	入江内湖西野遺跡	(28.5)	2.9	両側1回

※大戊亥遺跡 各形式ごとの出土点数は未確認

4.県内における齋串Cの事例

上御殿遺跡で確認できた古墳時代の齋串である3種類のうち、齋串Aや齋串Bについては奈良時代から平安時代の河道からも出土しており、古墳時代以降も継続して使用され続ける。一方で、齋串Cについては奈良時代から平安時代の河道からは出土しておらず、古墳時代に使用された齋串とみられる。齋串などの木製品は河道などから出土することが多いが、時代ごとの単純な堆積ではないことが多く、同時代の他の遺物との関係が不明確で年代を判断しづらい場合が多い。したがって、形状から古墳時代の齋串として判断できる齋串Cについて県内での出土事例を確認していきたい。齋串Cが出土した上御殿遺跡以外の遺跡は、県内では5遺跡を上げることができる(図2・図4)。なお、掲載番号は各調査報告書のものをそのまま用いた。

①穴太遺跡(大津市)

穴太遺跡は、比叡山麓から流れ出す河川によって形成された扇状地に立地する遺跡である。6世紀後半から7世紀前半にかけての集落が確認されており、渡来系集団の居住をうかがわせる大壁造り建物やオンドル状遺構が見つかっている。

この遺跡で確認された7世紀前半の溝(SD01)から、齋串Cが少なくとも5点出土している(1~5)。全長63.5cmを測るものが1点あり、その他は37~64cm以上の長さがある。上部の両側面には切り込みが1回施されている。これらと同じ場所からは薄板を素材とした刀形が13点出土している(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1994)。この遺跡では、別の調査区でも長さ53cm以上の齋串Cが1点(45)出土している。(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1997)

②神宮寺遺跡(長浜市)

神宮寺遺跡は、琵琶湖に近い長浜平野の南西部に位置する遺跡である。調査で見つかった河道(SR01)からは大量の遺物が出土し、土器は3世紀末から7世紀中頃にかけてのものがみられ、5世紀中頃から6世紀末にかけてのものが主体になると報告されている。遺物のうち、木製祭祀具については齋串・刀形・舟形・人形・鎌形・鳥形がみられる。齋串は12点出土しており、そのうち齋串Cは1点(327)が認められる。上端側が遺存し、上部の両側面に切り込みが1回施されている(長浜市教育委員会2004)。

③大戌亥遺跡(長浜市)

大戌亥遺跡は、神宮寺遺跡と同じく長浜平野の南西部に位置する遺跡である。6世紀末から7世紀前葉にかけての土器を含む区画溝から、齋串・刀形・剣形が出土している。齋串は50点を数え、5形式に分類されている。そのうち、B形式とされたものが齋串Cにあたり、上部の長さや切り込みの位置から細分されている。切り込みは両側面と片側に施すものがみられる。全長がわかるものはなく、15.4~51.6cm以上の長さがある(古川1991)。

④相撲湖底遺跡(長浜市)

相撲湖底遺跡は、姉川の河口近くに位置する遺跡である。第2調査区で確認されたスクモと細砂の互層から、縄文時代から中世にかけての土器や木製品に混じって、齋串が出土している。齋串3点のうち、齋串Cは1点(W268)認められる。側面ケズリは不明瞭であるが、上部と下部の幅には差が認められることから齋串Cと考えられる。上部の両側面には1回の切り込みが認められる(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2003)。

⑤入江内湖西野遺跡(米原市)

入江内湖西野遺跡はかつて琵琶湖に存在した入江内湖の南岸に位置する遺跡で、縄文時代から鎌倉時代までの集落跡・遺物散布地として周知されている(滋賀県文化スポーツ部文化財保護課編2022)。調査で見つかった古墳時代後期から平安時代中期にかけての河道(溝1)から、縄文時代から平安時代にかけての大量の土器や木製品が出土している。木製品のうち、木製祭祀具は刀形と齋串がある。齋串は15点出土しており、その中の1点(394)が齋串Cとみられる。切り込みは上部(幅が広い部分)の両側に1回施されている。長さは28.5cm以上を測る(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2002)。

5.齋串Cについて

県内の遺跡から出土した齋串Cの事例集成からは、以下のような点が認められることできる。大きさについては、齋串のなかでも大型のものが主体であることが特徴といえる。全長が分かる穴太遺跡(1)は63.5cmである。その他のについては28cm以上のものが13点、そのうち50cm以上のものが5点みられる。長さの違いが意味するところは不明であるが、役割が異なるなどの違いを想定することができる。

年代については、6世紀後半から7世紀前半にかけての時期を示す事例が認められた。7世紀以降の事例がないことから、6世紀から7世紀にかけての古墳時代に使用されていたと考えられる。齋串の特徴である切り込みについては、両側面に1回施すものが13点、片側面に1回施すものが2点であることから、両側面に1回施すことが基本的な造作といえる。他の形状をした齋串においては、7世紀末以降に切り込みの回数や位置が増えたものがみられるようになるが、齋串Cには認められないことは、古墳時代に限って使用されたことを示すものと考えられる。

齋串Cを「矛形」とする意見があり、矛の刃部や関、柄を模した形代と考えられている。同様の形状をしたヤリの可能性も含みつつ、長柄を持つ武器を模した祭祀具であるとされる(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所2019)。齋串Cには、齋串の特徴である切り込みが上部の側面に必ず施されていた。この点は、この遺物を齋串とみる重要な要素である。ただ、切り込みは刀形にも施す例が

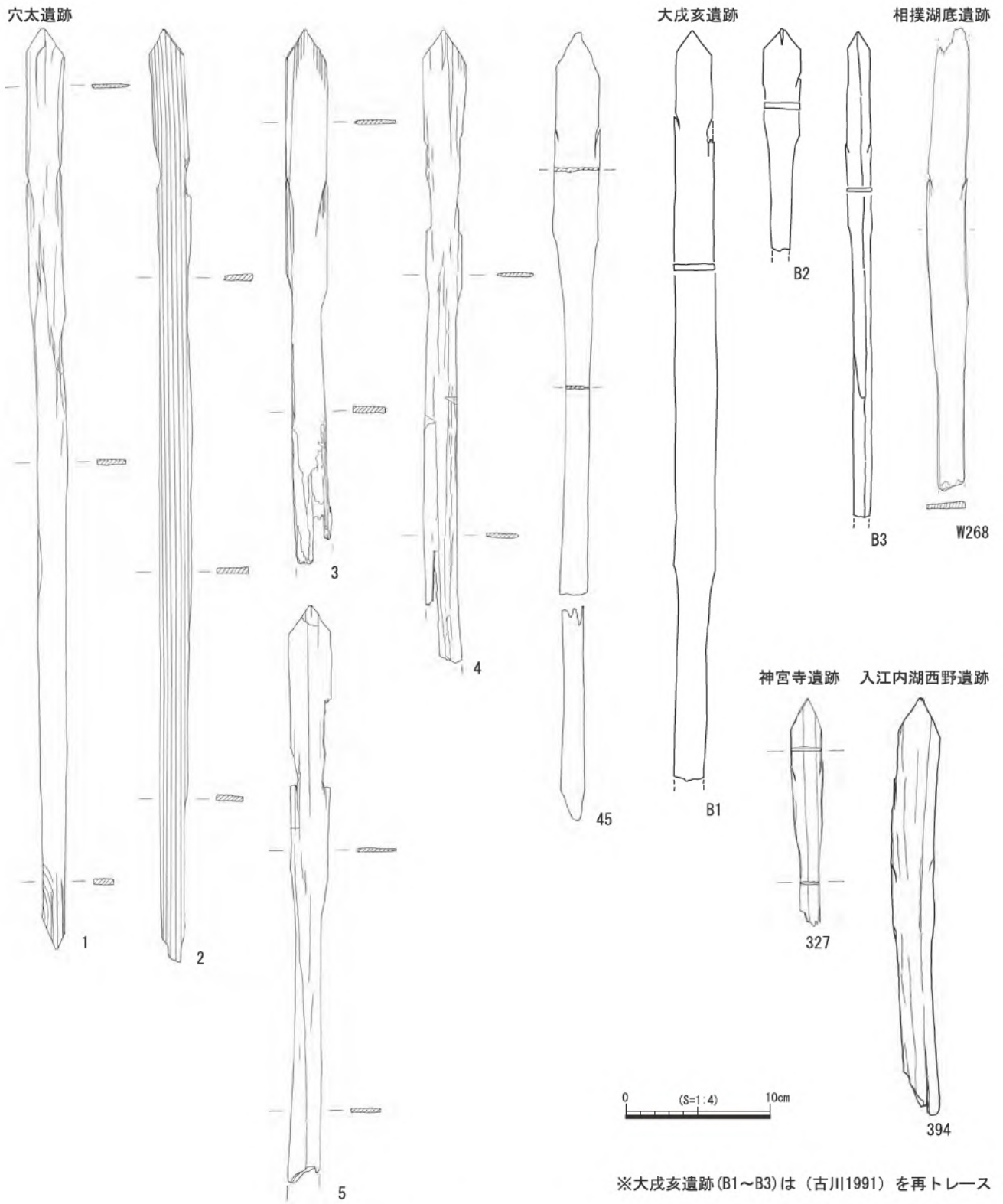


図4 斎串 実測図2

あるため斎串と限定することはできず、いずれの可能性も考えることができる。

6.おわりに

斎串Cが確認できた遺跡は県内の広い範囲に分布している。この状況から、古墳時代の祭祀具として広く利用されていたものと考えられる。上御殿遺跡の調査成果から、斎串Aや斎串Bとした様々な形状の斎串とともに使用されていたことがわかっていく。形状の違いに加えて出土点数にも差がみられることから、おそらくはそれぞれに異なる役割を担っていたと思われる。大型のものが主体である斎串Cが担った役割を特定することはできないが、有力者が執り行う祭祀のなかで刀形などの祭祀具とともに存在していたとみられる。

協会1994)から転載、327:(長浜市教育委員会2004)から転載、B1・B2・B3:(古川1991)から転載、W268:(滋賀県・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2003)から転載、394:(滋賀県・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2002)から転載。

(なかむら ともたか:調査課 課長補佐)

文献一覧(著者名・機関名50音順、刊行年順)

- 黒崎直(1977)「斎串考」『古代研究』第10号、元興寺仏教民俗資料研究所
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1994)『穴太遺跡発掘調査報告書I』一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1997)『穴太遺跡発掘調査報告書II』一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2002)「入江内湖西野遺跡」県道彦根米原線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2003)『琵琶湖北東部の湖底・湖岸遺跡』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書7
- 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2019)『上御殿遺跡』鴨川補助広域基幹河川改修事業(青井川)に伴う発掘調査報告書3
- 滋賀県文化スポーツ部文化財保護課編(2022)『令和3年度 滋賀県遺跡地図』
- 中主町教育委員会(1990)『吉地薬師堂遺跡第2次発掘調査報告書I』中主町文化財調査報告書第22-1集
- 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所(2019)『木器集成図録一飛鳥藤原篇I一』奈良文化財研究所史料第92冊
- 長浜市教育委員会(2004)『神宮寺遺跡』長浜市埋蔵文化財調査資料第54集
- 古川登(1991)「古墳時代後期後半の祭祀について」『福井考古学会誌』第9号、福井考古学会

挿図典拠

- 図1 筆者作成。
- 図2 筆者作成。
- 図3 (滋賀県・公益財団法人滋賀県文化財保護協会2019)から転載。
- 図4 1・2・3・4・5・45:(滋賀県・公益財団法人滋賀県文化財保護

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.39 2026.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages